

美しい自然は、昔も今も変わりになく私たちを感動させてくれます。私は戦後生まれですが、年を重ねるごとに、この時代に生まれ美しい自然に囲まれて生活できる幸せを強く思います。自然は私たちに心の安らぎを与えてくれます。思い悩むことがある時、自然の中に身を置くと心の充電ができます。自然はかけがえのないもの。子孫に美しいまま残してゆくのは、私たち大人の責任だと思えます。私には近くに住む三人の孫がいます。時々、早朝に電話が入ります。「おばあちゃん、今日



平和への願い

目には青葉山ほととぎす初鰹はつがら

はね、保育園にお迎えにきてほしいの。」この春、入園したばかりの四歳の孫からです。「はい、お迎えに行くから楽しんでおいで。」と私。ささやかな平和を感じるひと時です。「おばあちゃん、仲良し川辺に連れていってよ。」と昆虫や水生生物が大好きな九歳の孫が言います。「ザリガニはね、ハサミの大きいのは雄なんだ。お腹にも印があるんだよ。」と私の知らないことをたくさん教え



東赤砂 西村 千津子

てくれます。

娘二人を育て男の子の育てに関わったことのない私は、三人の孫の言動・行動に驚き感動しながら子育てのお手伝いを少しさせていたいています。本当は孫たちから生きる喜びを与えて貰っているのです。

三月末に「ヒロシマ・ナガサキ」の記録映画を主人と共に見ました。映画は「八月六日は何の日か知っていますか？」という街頭インタビューから始まったのですが、殆どの人が首を傾け、「広島に原爆が投下された日」と答える人はいませんでした。その記録映画は、数ある「ヒロシマ・ナガサキ」の映画の中でも、一番衝撃の少ないものだと後で聞きましたが、目に飛び込んでくる映像の悲惨さに涙が溢れました。全てを奪ってしまう戦争も原爆投下も二度とあってはならない。八月六日は決して忘れてはならない日だと改めて思い、世界の永久平和を強く希望しました。

今年には戦後七十年になります

戦後七十年の節目にあたって

高木 小松 保美



ミャンマーへの慰霊の旅

「お父さん、遅くなりました。六千キロのビルマ（現ミャンマー）はあまりにも遠い国でした。しかし、今お父さんと同じ風景を観ることができ感無量です。下諏訪の美味しい水と酒をお持ちしました。どうぞ、召し上がって下さい。そして、私と一緒に日本へ帰りましょう」と追悼文を読み上げ、真赤な夕陽に向かって同行の仲間と『故郷』を合唱しました。

まるで、仏教でいう西方浄土に祈りを捧げているような思いでした。最後にみんなで「お父



ミャンマーでの個人慰霊祭

さーん」と思い切り呼びかけて、永年夢見たミャンマーでの個人慰霊祭を終了しました。仲間のどの顔も涙でぐしゃぐしゃでした。

全ビルマ戦友団体連絡協議会発行の『勇士はここに眠れるか』によると、ビルマ作戦は約三十三万人の日本軍が米支・英印の連合軍と三年七か月の長きに亘って戦い続け、十九万人が二度と祖国の土を踏むことができなかった激戦だったとあります。進攻作戦中は将兵の士気も高揚しており、アラカン山系の峻険な山道も三十キロの重装備で突破したが、退却となると気力の衰えた栄養失調の身ではわずかな装具も身体にくいこみ、同じアラカンの峰々は越え難い障壁にみえ耐えかねて次々と倒れていったとあります。遠く離れてはかり知れない絶望感にさいなまれたであろう兵隊さんたちを思う時、胸が張りさけそうな思いです。戦争はこのような底知れぬ闇があるのです。戦争は決して天災ではありません。

戦後七十年の節目にあたって

天皇・皇后両陛下は戦後七十

年の節目のこの四月、「先の戦争で亡くなった全ての人々を追悼しその遺族の歩んできた苦難の道をしのびたい」と申され、パラオ共和国を訪問し永年の思いを遂げられました。思えば七十年前、多くの人命と財産を失った戦争はポツダム宣言を受諾して終結しました。私たちは戦後の廢墟と混乱の中、歯をくいしばって生き抜いてきました。それから七十年の歳月が流れて、今や平和国家として世界にも稀にみる繁栄を遂げることができました。今年には国内外でいろいろなイベントが催されており、世界の人々の目は厳しく我が国に向けられています。

わが国は高齢化も進み、戦争を知らない世代が七割を超えたと言われています。私たちは今一度不戦の誓いを確認し合い、戦争の悲惨さと平和の尊さを次世代に継承していかなければならないと強く思います。

が、残念ながらこの間世界各地での紛争が途絶えたことはありません。また、最近各地に大きな自然災害が頻発しています。自然がひとたび猛威を振るったら、人はなすすべがありません。でも戦争をはじめとする全ての人災は、私たち一人一人が平和を強く希望し、努力することによって無くすことができる筈です。それは身近な家庭生活から、近隣へ社会へと輪を広げていきます。なぜ戦争がいけないのか。なぜ人を傷つけたり、いじめたりしてはいけないのか。仲良く楽しく生活することが、どれほど素敵なことなのか。

あたり前のことばかりですが、このことを子どもたちに伝え、教え導いてゆくことが、親として生きる私たち大人の責任だと思っています。

次代を担う子どもたちが、美しい自然に見守られながら、心豊かな人間へと成長し、平和で希望に満ちた人生を歩んで欲しいと強く願っています。